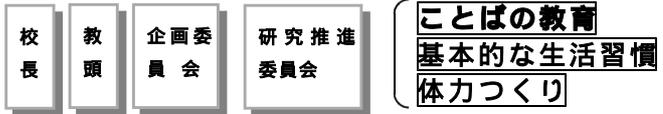
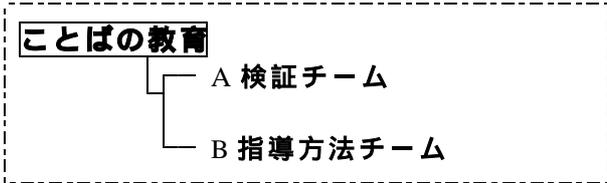


学校名	呉市立両城中学校
校長名	榎本 信明
所在地	呉市両城2丁目22番15号
H P	http://.ryojoyo-j.hiroshima-c.e.jp
学級数	7
タイプ	.

【 研究 組 織 図 】



両城小・港町小との小中一貫教育の取組の中で



1 研究の概要

(1) 研究主題

確かな学力定着のあり方
 ~より深く考え、より豊かに表現する
 力の育成を通して~

(2) 研究のねらい

昨年度からの「ことばの教育」の取組みを
 継続し、総合的な学習の時間を中心に、各教
 科に言語技術を強く意識した実践を取り入れ
 る等、各教科等を通して指導を行ってきた。
 そして、より深く考え、より豊かに表現する
 力を育成し、確かな学力・豊かな心・論理的
 思考力を身に付けさせたいと考えた。

(3) 研究組織・体制

校内研修会の他に、研究推進委員会を随
 時開催し、研究活動の円滑化・研究組織の
 体系化を図る。

「ことばの教育部会」を設置する。

「ことばの教育部会」では、二つのチー
 ム（A検証・B指導方法）に分け、各教師
 の役割を明確化した。

A 検証チーム

教育課程の編成・実施に関する工夫・
 改善・充実を図る。

習熟度別、少人数指導、T・T 指導等を
 効果的に取り入れる。

情報機器の活用を行う。（テスト、ア
 ンケートなどの調査・分析）

B 指導方法チーム

基礎的・基本的内容の厳選と定着化を
 図る。

各教科等の年間指導計画の見直しを行
 う。（「ことばの教育」に係る全体計画
 ・言語技術指導を取り入れた各教科等の
 年間指導計画）

言語技術を活用した実践事例集づくりに
 取り組む。

小中一貫教育推進のため、共同研修を
 行う。

研究内容を分析し、常に成果と課題を
 明らかにすることにより、その後の取組
 みに役立てるようにする。

2 2年間の取組みの概要

(1) 言語技術に関する生徒の意識調査・実態調査
 を実施

(2) 校内研修及び校内研究授業

言語技術指導に関する共通理解（各教掲示
 等の実施）

言語技術演習

言語技術を活用した年間計画と実践事例の
 交流

言語技術を活用した各教科等実践事例の作
 成

(3) N R T 検査の実施

(4) 小中共同研修の実施

3 研究の成果と課題

(1) 成果

【意識調査・実態調査より】

意識調査では、全学年で見ると12項目中
 10項目で、「よくできる」「だいたいできる」
 が60%を超え、昨年度より向上が見られた(表
 1参照)。

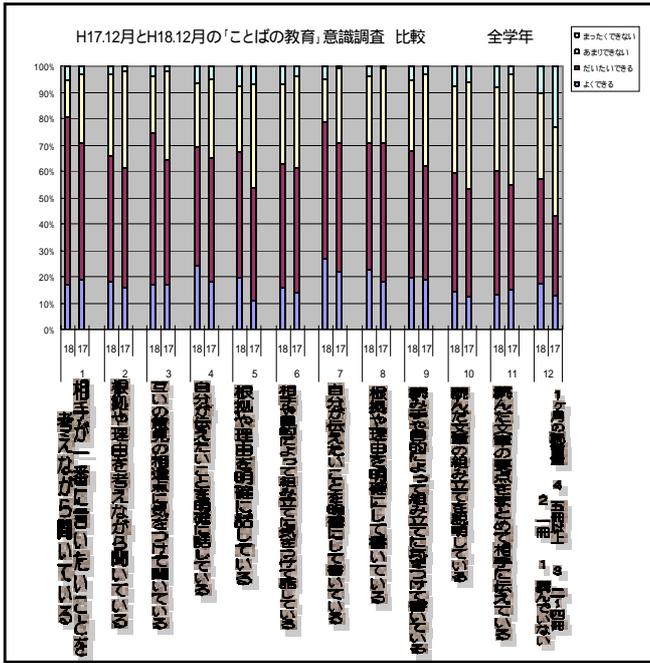
また、学年が上がるにつれて、「よくできる」
 と回答した割合が20%を超える項目が増え
 た。

実態調査では、「第一人称を入れる」「結論
 を先に書く」の2項目が100%であり、「ナン
 バリングを使っている」についても30%近
 い伸びが見られた。また、「大から小への視点
 移動」も80%程度と高かった。

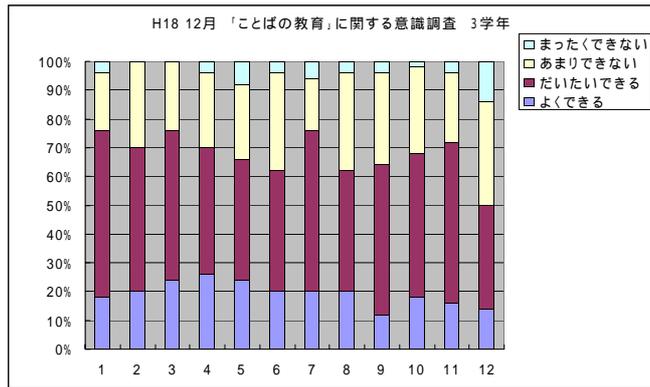
さらに、「無回答」や「意識をしていない」
 項目は低い値であった。

また、考えを記述する際、主語を入れ結論先
 行で表記し、その理由をナンバリングで表記す
 ることについては100%であった(表3参
 照)。

(表1)

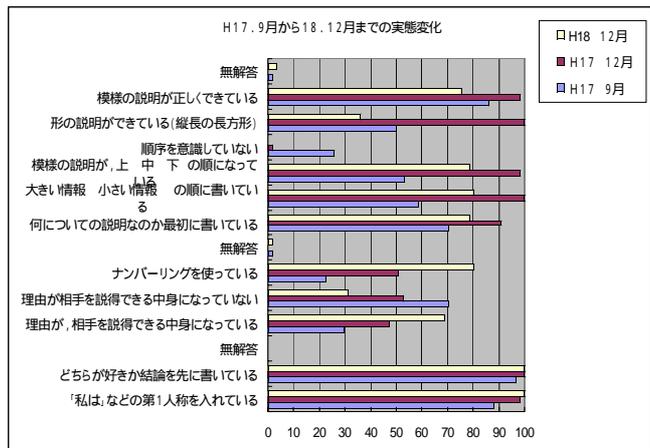


(表2)



質問項目は表1と同じ

(表3)



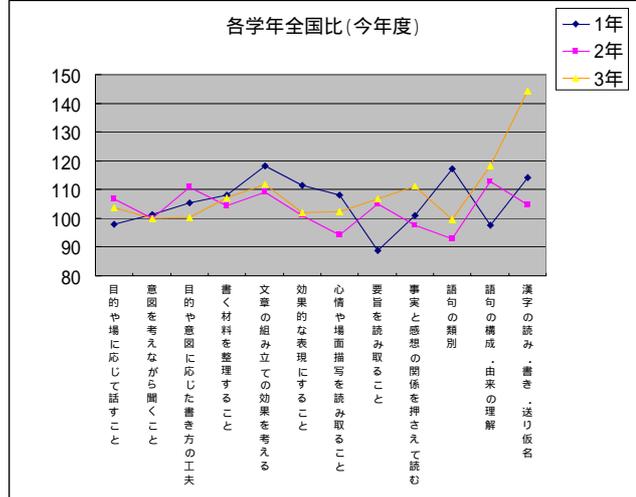
【NRT学力検査より】

昨年度との比較では、2年生については、全国平均に達しなかった項目は昨年度並みであったが、昨年度最低の達成率であった「事実と感想の関係を押さえて読む」が13.6ポイント(84.97.6)上がった

た(表4参照)。

3年生については、全国平均に達しなかった項目が3項目から1項目に減少し、昨年度最低の達成率であった「語句の類別」が14.7ポイント(85.99.7)上がった(表4参照)。

(表4)



【行事や授業などの取組の様子より】

朝会のような大勢の前では、結論先行・ナンバリング等が意識されるようになった。また、外部からの講師の話聞く際にも、ナンバリング等を意識しながら聞くことができるようになった。

【教職員意識調査より】

すべての教職員が言語技術を意識して話すようになった。

【教職員の取組より】

言語技術を取り入れた校内研修・研究授業では、パイロット教員を中心とした演習などを意図的、計画的に取り入れた。これにより、指導法、教材等の開発が積極的に行われるようになった。

(2) 課題

主な課題は次の3点である。

言語技術への意識は高まったが、それを応用しながら思考を深めることについては、課題が見られる。教師の繰り返し発問等を工夫する必要がある。

言語技術の日常的な活用を図るために、普段の学校生活の中で言語技術を意識させたり、活用させたりする場をさらに意図的に設ける必要がある。

各教科等における言語技術の効果的な活用の仕方について、実践を通してさらに明らかにするとともに、言語技術の年間活用計画の改善及び充実を図る必要がある。

